

愉快に樂しむ繪

黒田清輝

- 繪で物語りをする——漫然と繪で物をいはせるといふ事、歴史を語つたり、事實を話させたり、情愛を述べたりするといふやうな事は、全然すたれたといふ程ではないが、先づ珍重されない時代となつて來た。日本といふ小さいサトクルからではない、世界列國の藝術上の趨勢から觀察してだね。
- 即ち、理想畫なぞといふものは、今日では美術として厭がれて來はせぬが、此の煩瑣な今の世の中で、繪を見てまで、考へねばならぬといふ事は、何人も苦痛とする處であるから、たゞ愉快に見て樂しめる繪が珍重されるやうになつて來るのは當然ではなからうか。
- それも其の筈サ。折角愉快に樂しまうといふ考へから繪畫を見て、却て其の繪から何物かを聞かされるなぞといふ事は、誰しも苦痛に堪へないからネー。
- 此間も、或る學者が僕に、近頃の繪は裝飾的傾向を帶びて來たネ。といつて居たが、これは非常に穿つた話で、如何にも此頃の繪は、圖案的、裝飾的になつて來た。
- それは、世間の人の繪に對する趣味、繪に對する要求が昔と今と趣きが違つて來たからで、見て物を思はせるやうな繪よりは、愉快に感ずる裝飾的作品が一般に喜ばれる傾向となつたのは、時代の然らしむる所といはねばなるまい。

○であるから、今後の作品は、此の傾向の下に指導し、啓發せねばならず、それには幸に文部省の展覽繪が好個の機關で運用の如何で如何様にも發展し様と思ふ。

○僕は、現代の作家が十分此一般傾向を咀嚼し、自然の研究を怠らず、外國の經驗をも利用して、一刻も早く世界の藝術と相比肩せんことを希望するのである。

記者曰く黒田畫伯の談話、滾々として盡きざりしも紙面狭隘のため、割愛して他日に譲る

〔『読売新聞』明治四四年一〇月一五日〕